
馬鹿ですが何か？

祿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿ですが何か？

【Nコード】

N9262Z

【作者名】

祿

【あらすじ】

まったりと生きてきたとある馬鹿と、それに比べてキチツと生きてきた男が、神の手違いで死んでしまう。
かわりにインフィニットストラトスの世界に転生させられることになる。

おまけに変な能力も付けられていた。

二人は、まったりと生きて行けるのか？

NEW

唐突だけが俺は思い付いた。

命は一つであり、人間に前世や来世など”次の人生”はないと。

人は死んだら、そのまま人格や記憶など消えて無くなる。

前世来世、天国地獄、転生蘇生などは人間の都合のいい妄想や想像でしかない… けっきょくは存在しないものだ。

「……………で、結局なにがいたいんだ？」

「やだなあ、てっちゃん。もうわかってるくせに」

はあ、とため息をつく友人を飛び越えて親友（仮）の佐久間哲^{さくま てつ}、通称てっちゃんは、めんどくさそうな顔をしながら見てきた。
まあ………… あれだ。自己紹介しとくしますか。

「岡山^{みどり} 17歳男 乙女座で誕生日は想像に任せるとして血液型はO型だ。よろしくな！」

「誰に自己紹介してんだよ……………てかさっきのは何なんだよ」

「いやあ、バスの中ってひまじゃん？だから頭にポツと出てきたのがさっきのなのだ。で、一度しかない人生を無駄にせず、しっかりと生きていつてほしいって言いたいわけ」

「たまにいいことっぽいこと言うよな」

そんな雑談をしながら、てっちゃんの高校に向かって歩いている。
てっちゃん曰く、今日は文化祭なんだって、もう昼なのにここでもな
にしてんだろうね？

重役出勤とはなかなか偉くなっただんな。

「お前はほんとくと寄り道するからな。その間に日が暮れる」

「へー、そりや大変だったね？」

「お前のことだぞ！？」

ぼてぼてと歩いていると、横断歩道のだ真ん中に金色に光る円形の
なにかが目に入った。

てっちゃんは気づいてないみたいで、ぺらぺら何かを喋っている。

「（このまま気づかれないように確認して、500円玉だったら即
回収）」

「（こいつ絶対聞いてないな…今度は何を考えてんのやら）」

金色に光る円形のなにかの横を通り過ぎるときに横目で確認。
それは期待していた通りの500円玉だった。
車がこないのを確認して、すぐにしゃがみ込む。

「みどり危ない！」

「へ？」

横断歩道を渡ったところにいたてっちゃんが、すごく焦った顔をしていた。

右側がやたら騒々しくて、見てみるとトラックがこちらに突っ込んできていた。

避けようにも距離は25メートルくらいで、スピードも速くて、とてもじゃないけど避けられない。

「…………まじか？」

「ん？待てみどり。なぜ俺を掴む？」

「てっちゃんシールド！がぐ！」

「ぶるうわ！」

あえなくトラックと正面衝突。もちろん俺とてっちゃんは即死。

一度きりの人生をどうのこうの言ってた奴が友人というより、悪友に近いやつを道連れにするのは割と愉快（笑）

……い……か

「……………」

おき……かの……バカ……

「……………（いらいら）」

「おきんか！この馬鹿者！」

「うつせえな……人が気持ち良く寝てんのに耳元で騒ぐなよ、糞豚。殺されたくないなら黙ってる屑。食い殺すぞ！」

「……………（うるうる）」

「み、みどり？少し落ち着けよ、な？」

聞き覚えのある声がしたので、そっちに目を向けると悪友てっちゃんがたっていた。

……あれ？おかしいな……てっちゃんは俺が殺したはずなんだけど、何で元気に立ってんの？

「そついえばお前……俺を道連れにしてくれたよな？」

「記憶にないな。改ざんされたかも」

「あー。そのことなんじゃが……あれはわしのせいなのじゃ」

口調に似合わないような容姿をしている女性（仮）は、申し訳なさそうに罪を自己宣告してきた。

よく見るとセミロングの黒髪で小柄、モロ好みに当て嵌まる。

「あなたのせいってどういことですか？」

「ちと手違いでトラックをお主に確実にぶつかる距離に置いてしまつてのう……まさか友人を盾に使う鬼畜な奴だとは思っておらんかったがな」

「だよねー、ちゃんと車がこないのを確認したのにトラックが来たのは不思議だったからね」

こん畜生……一度きりの人生をどうのこうのって語ったあとなのに無駄死にじゃないか。

てかこの人は何物？果物？たべていいのかい？

「食べれないから落ち着けみどり。話が進まない」

「わしは神じゃ。まああれじゃ、お主達を転生させることしか償えんが いいかの？」

「まあ生き返れるなら俺はいいですけど」

「（転生？さつき否定したばかりなのに実在するという新事実……これは新たに新みどり理論を考えなきゃ）」

新みどり理論を考えている間も、話し合いは進んで行った。交渉とかはてっちゃんにいつも任せきりなので、けっこう信賴してる。

いろいろ質問されたけど、てきとつに返事しといた。

「それじゃあ、転生させるぞい。準備はよいか？」

「はい」

「元の世界だよね？」

「いいや」

「え？」

てっちゃんの返答に驚いていると足元が光始めた。

てっちゃんに視線を戻すと、やりきったって顔で教えてくれた。

「俺達がいくのはインフィニットストラトス……ISの世界だ」

「まてまて！それは俺がまったりできないという最悪のフラグが立ってしまっじゃないか！」

神（仮）とてっちゃんは微笑んでゆっくりと口を開いた。

「「どんまい」」

「うるせええ！転生中止！やめい！」

必死の抵抗はむなく、光に飲み込まれた。

二人を転生させた神は二人の立っていたところを見つめてたたずんでいた。

そして自分の体を抱き、身震いすると顔を紅潮させてうつとりした。

「……ふふふ。みどり…か」

神はスウツと姿を消した。

次の瞬間にその空間は割れて無くなった。

1「いらっしやいませ！」

俺は考えた。

前回、おつちよこちよいな神様に祿理論をひっくり返されてたので、新しい祿理論が必要になったからだ。

今回は絶対ひっくり返されることがないようにしなきゃいけない…

…俺のプライドがそうしなきゃいけないって言うてる。

「……………」

「……あのう…岡山くん？自己紹介してくれない？」

「あつ、はい」

いっけね。

小学校の入学して一日目だっけ？出席番号速いってだるいねー、ほんとにめんどくさそうな。

「岡山みどりです。お腹減ってますので食べ物恵んでください。以上です」

「あっはい。ありがとう、でもね？食べ物給食のときにしかでないよ？」

わかってるつつうの。

ちなみに俺は岡山家に生まれて名前はみどりだった。
前世（？）と変わってないのであんまり嬉しくないが、前世（？）
の岡山家よりだいぶ自由度が高いからお気に入りだ。
てっちゃんの方も前世（？）と変わってない。

「佐久間哲です。よろしく」

ね？変わってないでしょ？なんの面白みもない第二の人生だわ。
そうこうしてる内に授業が終わった。

「みどり、やっぱりあれと同じクラスになったな」

「あーあれね。まあいいんじゃないか？俺的にはほのぼの生活に水
を差されない限り何かしようとは思わないよ」

「お前らしいっちゃらしいな」

それから何ヶ月かたったある日、いじめというものを生まれて初めて
生で見た。

割と愉快的なものではなく不愉快極まりないので、幻滅した。

「おい。おとこ女は一人で掃除しろよ」

「そつだぞ。この汚い机と教科書もな！ギャハハハハ」

ポニーテールの子を複数の男子が囲んで、その子の机を倒して教科書をぶちまけて踏みにじっていた。

机にも落書きしてあり、いまずぐにぶん殴ってやりたいが、てつちやんに羽交い締めになされて動けない。

「おい、何羽交い締めにしてくれてんだよ」

「落ち着け、まずは落ち着け。最初は言葉からにしよう、いきなり暴力はまずい」

「仕方ないなあ」

そういったたはいいものの実行する気なんてサラサラない。
ドアを勢いよく開けて教室に堂々とする。

「おい、何だよお前」

「あー、こいつは確か女みたいな名前のやつだぜ？確かみどりっていったよな？」

「みどりちゃんとかおんな男だ！ハハハハハ」

ぶち

「お前「何してんだ！大人数でよってたかって！」……ち」

一夏登場で怒りゲージが一周回って安定ラインギリギリで止まった。別に台詞遮られて怒ったわけじゃないし！

「なんだよ！お前、このおとこ女とおんな男の味方すんのかよ！」

「俺はお前達みたいに仲間が多くないとそういうこと出来ない奴が大嫌いなんだ！」

「なんだと！？このー！」

一人の男子が一夏に殴り掛かった瞬間に、俺はそいつの腹を思いつきり殴った。

泣きべそかきながらうずくまる馬鹿1をほつとき、次々と殴り掛かってくる馬鹿複数をてっちゃんと蹴散らしていく。

「てっちゃん。相手は大人数だから急所をついてけ、幸い全員男だからな」

「まあ、まともにやったら面倒だし、手間かかるもんな」

途中から一夏と箒（途中で気づいた）が参戦してくれたので、だいぶ楽に片付いた。

で、意外だったのが一夏と箒のコンビネーションが良かったのは何となくわかってたからいいんだけど、二人とも強いね。

「ありがとうな、助けてくれて」

「「いえいえどうもどうも」

「ほら、箒もお礼言えよ」

「あ、ありが…とう」

「「いえいえどうもどうも」

同じことを繰り返し使う。
けっこう楽しいもんだ。

「岡山も佐久間も強いな！どこか道場とか行ってるのか？」

「俺は我流かな。あとみどりでいいよ」

「俺はコイツの技の実験台にされることがあるからな。それで身に
ついた、あと「てっちゃんていいぞ」……おや？」

「へー、みどりもてっちゃんも凄いんだな！箒も俺もけっこう強い
んだぜ」

「さっきの見たらわかるよ」

帰り道が何故か大半一緒だったので歩きながらしゃべる。
さっきの男子は今頃職員室でお説教だ。

愉快愉快！

「……………」

「ん？みどりどうした？」

「あー夏、みどりは時々いきなり考え事することがあるんだ。気にするな」

「なぜいきなりなんだ？哲」

「なんでかしらんだけど、ふと気づくことがあるんじゃないか？」

「へー苦労してんな」

そのまま家に帰り着くまで考え事は続いた。

考え事の内容はプールサイドに豆腐を並べるにはどのくらいの量の豆腐が必要か、というとても下らないものだった。

それから幾年が立ち、高校入試の前日。

「時間進むの速いな。ありえないな。読者のみなさんにあやまれ馬鹿」

「何いつてんのやら……」

俺は受験勉強から逃げだし、海岸を散歩している。

鈴の帰国やらあったけど、いい一年だったと個人的には思っている。ぽけーっと海を見ていると沖の方にプカプカと浮かぶ人型のものがあつた。

「ねえ……てっちゃん」

「なんだ？」

「あれって人じゃないよね？木か何かだよな？」

「んー……人じゃないと信じたんだけど、どうみても人なんだよな」

「……」

しばらく沈黙……あまりの出来事に頭がついていかなかった。

今は2月、海水浴を楽しむような季節じゃないし、見た感じサーフボードを持っていない。

おまけに沖の方にどんどん流されていつてる気がする。

「……まずい！」

ハッと我に帰り、海に猛ダッシュする。
なりふり構っていらなくなるときつてあるよね？

「おい！みどりお前泳げないだろ！」

「水面を走ればいい！いくぞ…瞬足！」

水面を沈む前に蹴り、前に進んでいく。
てっちゃんからは人の形をした人じゃない物を見るような目で見られてる気がする。

緊急事態なら人は限界を超えられるんだ。

「よつと！」

浮かんでいた人をうまい具合に担ぎ、浜に戻っていく。
しかし足に限界が来たみたいで、どんどん重くなって行って浜に無事たどり着くのが難しくなった。
ので、奥の手を使うことに

「佐久間哲！受け取れええええええええええ！」

「うおおおお!!」

ドスン

「危ねえな！人を投げるんじゃない！俺がキャッチしなかったらどうなってたか……………ん？みどり？…………あれ？」

バシャバシャ

「…………さむっ」

「何で濡れてんの？」

「足に限界が来て、海にどぼん」

「なるほど、なら早く帰るぞ。ていうかこの子どうすんだ？」

てっちゃんが意識のないやたら見たことがあるような無いような感じの女の子を指差した。

この時期に海に入ってたんだから、俺より危険な状態なんだろう。

「迷ってるヒマはないね。ここからだ俺の家が近いから俺が連れて帰る」

「大丈夫か？」

「なんとかなるだろ」

俺は女の子を背負って、家に向かって走り出した。家の前になると、てっちゃんの前に出て両手を下に組む。

俺は靴を脱いでその手を踏み台に2階の自分の部屋の窓のところまで飛ぶ。

ジャンプする瞬間にてっちゃんが手を上に上げてくれたので、だいぶ滞空時間が稼げた。

蹴りで窓を開けてなかに転がり込むと同時に暖房を付けて、身ぐるみ剥がしベッドの中にほうり込んで掛け布団をかける。

「ふう……あとはあいつの回収だ」

部屋を出て、階段を下りて玄関のドアを開けると、俺が脱いだ靴を持って待っていた。

なぜかおまけにもう一人女の子を担いで……。

「……………助けてくれ」

「……………入れ」

解説しよう。

てっちゃんは女子が苦手で滅多なことが無い限り、自分から女子に触れようとは絶対にしないが、恋愛対象になるのは女なのだ。

本人もなかなか悩んでいるがどうしようもないのでほっとしてる。

「でだ、なぜにお前の部屋に入った瞬間に目に入るのが、ベッドで寝てる子が着てた服なんだ？」

「濡れたままじゃ気持ち悪いと思って……大丈夫、下着姿は見えない。見ないようにしたから」

「身体能力全開でいったのか……まあ妥当だろうな」

そっぴいながら担いでた子を俺がひいた布団に寝かせた。
冷や汗かいていたのは気にしない方がいいだろう。

「目が覚めるまで何も出来ないな」

「覚められても困るけどねー」

「なんでだ？……っと、そうだったな」

俺は立ち上がり、母さんのところにいった事情を話すと、嬉しそうに猫と犬のパジャマを持って俺の部屋にいった。

誰に着せようとしていたのか甚だ疑問であるが、とにかく第1の危険は去った。

「ふふふ、似合ってたわ」

「もう着せたんだ。はいね」

いつもはすべての行動が遅いくせに

「可愛い子連れて来たわね。彼女さん？」

「事情説明したよね！？どうやってたらしめるのさっ！」

『あらあら』といいながらキッチンに戻っていった母さんの背中を見る限り、完全に勘違いしてる。

「（しかし、海の子…どこかで見たような……こう、転生直前かそれ以降に……なんだっけ？）」

考え事しながら部屋に戻ると、カッターが俺の頬を霞めて通過した。飛んできた方向を見てみると、必死に説明してるてっちゃんと凄い眼光で睨んでくるてっちゃんの担いでいた女の子がいた。

「ぶっちゃけた話。その体勢は勘違いされるよ？」

「助けるよ！普通に助けるよ！」

キッと睨んでくる女の子の前に正座する。
もちろん手はみじかにあった紐でくくつとく。
すると警戒を少し緩めてくれた。

俺だけ

「なあ……何も解決してないように思えるの俺だけ？」

「あの、岡山みどりです。あなたは？」

「……………江藤ありす。お前達は何者だ」

「漬け物、果物、くせ者、悪者、馬鹿者、生もの」

俺の返答が気に入らなかつたらしく、てっちゃんを簀巻きにしてから俺を押し倒してカッターを首に付けられた。

なんだか……心の奥から浮き上がってくるこの感情は何なのか知りたい。

「馬鹿にしてるの？ちゃんと答えないと殺す」

「ははは、やれるものならどうぞ？」

そっついながら自家製クラッカーをありすとやらの目の前でならした。

白い煙りが彼女の顔目掛けて吹き出し、視界を殺した。

その隙にありすの手からカッターを取り上げて、手に巻きといった紐で拘束して床に擦じ伏せる。

「さあ、何で気を失ったのか教えてもらおうか！」

「……………くっ！」

悔しそうな顔をしながらこちらを睨むのをやめないありすに何だか申し訳なくなってきた。

てっちゃんに助けを求めて視線をやると、『お前に任せた！』と言
い足そうな顔をしていた。

「えっとごめん。とにかく抵抗はやめよ？別にとって食おうなんて
思っていないから」

「……………」

「まああれだ。今から質問するからあってたら頷いて、間違ってた
ら横にふって。じゃないとプリンをぶちまける」

「……………（コク）」

「今ありすは追われている」

「……………（コク）」

「……………そいつらは裏の世界の者だ」

「……………（コク）」

「ありすはそいつらと一人でやってもへっちゃらだ」

「（コクコク）」

「正直お前は馬鹿だ」

「（ブンブン）」

大体の事情はわかった。

あとはどうするかだけど、この世に安全な所なんてあるわけないし

……………あつ、あつた！

1番安全で1番強い人がいてエリート集団の塊の学園が！

「てっちゃん一夏に連絡だ！コード233」

「了解！」

紐をほどこいてやったらすぐに携帯を取り出して、いろいろあの人に
言ってくれるように手配している。

ありすは顔を真っ青にして、暴れだしたのでギュッと両腕で押さえ
ておく。

顔が真っ赤になった気がするけどコイツのためだ。

「はなせ！この！」

「落ち着きなよ、君一人じゃ絶対にそういう人達には敵わない」

「やってみなければわからないだろう！離して！」

「もう……安全な場所で普通の女の子として暮らしてほしいから、あの学園に入れてもらえるように頼んだのに………」

「…あの学園って？」

「IS学園。エリートの集まりさ、そこに友人の姉が教員やってるって、とあるウサミミに聞いたから行けるはずだよ？あ、友人の姉って元世界一なんだよ」

ありすは俺の話を『ありえない』みたいな顔をして聞いていたので、そのままの体勢でイロイロ話してあげた。

ウサミミって単語が出るたびにピクツてなって、その人について質問してくるから、ありすという人間が少しわかった。

2「わんもあぶりーず」

割と題名にある名前の曲がある気がするし、誰か作ってくれないかなと思つてたりする。

元気で明るい曲になつたらいいなっていう願望。
しかし、それどころではないのが現実です。

「……（ぱくぱく）」

「……（もぐもぐ）」

目の前の担ぎ込んだ少女二人は、よほどお腹が減っていたのだろう……ガツガツと食事を食べていた。
母さんも何だか嬉しそうな顔しながらドンドンと食事を運んでくる。

「……ねえ。どうしてこの家の食事はこんなに美味しいの？」

「それはねえ。みどくんが強運の持ち主で金がかっぱがっぱ入るのよ。だから高級食材を使つてるの」

「へえ……あんたに取り柄があつたのね」

「俺は割とスペック高いんだぞ」

「そついえば佐久間って人どこいったの？」

「家に帰つたよ」

少し驚いた顔をしてこちらを見るポニテのありす。
どうやら俺とあいつは従兄弟か兄弟だと思っていたらしい。

「で、海で浮かんでた君はどうしたの？」

「わしか？」

……………ん？この喋り方知ってるぞ。

「わしはお主らの後を追ってきたのじゃ。なかなか面白そうだった
のでな、体も人間と全く同じにしているから問題ないぞい」

……………まさかね。

ありすの隣の女の子に体を近づけて、小声で話しかける。

（……………まさか、おつちょこちよいの自称神様？）「

（なっ無礼者！わしは正真正銘の神様じゃ！みどりよ、いつになっ
たら信じるのじゃ？）

（まさか追っかけてくるとは、さすが落ちこぼれ。尊敬するよ）

（うぬぬ！言うてはならぬことを言いおったな……………神の力思い知る

がいい)

(俺の勘で言うと、今のお前は治癒くらいしかできない)

(うつ！)

悔しそうな顔をしながら料理を頼張っていく。

頬つぺたが膨らんでリスみたいで可愛かったが、なぜかありすに睨まれているのに気づいた。

「えっと…なに？」

「何でもないわ。それでこの子は何て言う名前なの？仲良そうだし、知ってるんでしょ」

「実は知らない」

「なんと！」

神様が驚いたような声をあげて、身を乗り出してきた。
すかさずおでこにデコピンして椅子に座らせた。

「ぬおお……みどりよ、お主の体は強化してあるからデコピンでも痛いんじゃない」

「へえ、初耳だ」

「ちなみに身体能力も上げてあるのじゃ」

「ほう」

「わしのことは敬意を持って、そうじゃな……恋こいとよべ」

「わかった、恋れんってよぶ」

「人の話きいておったのか？まあそれでもいいが」

ほむほむとグラタンを食べていく恋は、ありすに一瞥してから少しニヤリと笑った。

何考えてるのかよくわからない、まったく面白そうだから俺達を殺して転生させたな……。

ブルルルポロロロ

「おっと失礼」

一夏から電話がきたので立ち上がり、場所を移動する。

「はい」

『みどり、一応千冬姉には言ってみたら』出来ることはない、普通に受験して入れ』ってさ』

「果てしなくケチだな」

『でもなんで千冬姉なんだ？IS学園ならその教員に頼めばいいのに』

「さあね、うーん。まあ妥当だろうね、仕方ない正攻法で行くかな。ありがとうな一夏」

『ああ』

電話を切り、ポケットからある紙を取り出した。
その紙にIS学園と記入し、もう一度ポケットにしまった。

「くくく、千冬さん…俺の正攻法は他の奴とは違うよ？」

満月の夜に一人、庭に立ち悪い笑みを浮かべながら、家のなかに入
った。

次の日、朝早くに家を出て学校へ猛ダッシュした。
基本朝早く学校に行くが、それより早い、人に捕まえられたくない
のと遅刻防止だ。

ちなみに9年連続皆勤賞狙っております。
今日は調子がいいでございます。…な・の・に！

「ふふふ……………（ニクニク）」

「…………むう」

目の前にいるセミロングの活発そうな身長150のミニマム娘のせいで、教室に行けない。

普通なら身体能力を駆使して向かうところだが、下駄箱の前に立たれると履き返れないので膠着状態。
試験？そんなもんもう終わったわ。

回想

「多目的ホールって広いよな、ありす大丈夫かな」

「ああ、迷子になるわけだ……次の扉を開けて人に聞くぞ」

「「賛成」」

ありすと恋と別れて、試験場に向かっている内に迷子になり、俺とてっちゃんは一夏はフラフラしていた。

そうしてるうちに一夏が扉を見つけて開けて中に入る。

「うーん。誰もいないよ？」

「あれ？これってISじゃないか？」

「（まずいな、あれに触れたらIS学園行きか）」

「てっちゃんどうした？」

俺はてっちゃんが険しい顔をしていたので、近くにあった灰色のものによつ掛かりながら、声をかけた。

すると背中の方が明るくなったと思えば、黒い服を着た人達が数人入ってきた。

「君達ここでなにしてるの！？関係者立入禁止よ！」

「えっISが男に反応してる……」

「今すぐ上に連絡を！」

まずいことになった。

すっかり忘れてた……あれだ、ほらよくあるじゃん？「いついつと」。

「おい、みどり……厄介なことしてくれたじゃないか」

「どうなるんだ？俺達」

「さあねえ……さらば！」

「「あつ！汚ねえ」「」

一夏を踏み台にして女の人の頭の上を飛び越えて廊下に飛び出す。
そして出口に向かって走った。

「まて！」

「待てといわれて待つ馬鹿はいません！」

「こうなれば実力行使だ！」

「追いつけるものなら追いついてみな！」

回想終了

というわけで学校に逃げて来たわけだ。

そしたらミニマム娘が下駄箱の前に立っていて、それを物影に隠れて見物してるという状況が出来たわけです。

「（ここであいつを味方につけられたら、割と戦力になるんじゃないか？）」

「……みどり大丈夫かな？」

「（ん？）」

「あいつ行き当たりばったりだから多目的ホールでやらかしてなきやいいんだけど」

「なんて失礼な！」

「えっ!？」

ミニマム娘はいるはずもない人の声を聞いて驚いた顔をして振り向いた。

「普通受かってるといいなとかじゃないの!？」

「ていうかあんた受験は!？」

「あんまり思い出したくない」

いろいろやらかしてきたからね。
今は追われる身です。

「まったく……あんたはいく先々で問題起こすわね」

「まあね。それで何してんの？」

「えっ!あ、その……な、なんでもいいでしょ!」

「まあね……」

ふと、後ろを見ると黒い服を着た人達が出口を封鎖していた。皆さんの目をみるかぎり、怒ってるようではいらしていません。

「我々について来てもらおうか」

「ちょ、みどり何して来たの？」

「えっと、IS触ってきた」

「えええ……」

じわじわと逃げ道を潰されて距離を詰められてきた。

後ろのミニマム娘もさすがに怖いらしく、袖を掴んできた。

「……うーん。目的は俺だからお前は危害加えられないと思うんだけど」

「そ、それでも怖いものは怖いの！わ、わるい！？」

「いえ別に」

完全に囲まれた状態で何かできないわけで、ブーツと黒服を見ていると近寄って来なくなった。

すると黒服の後ろから一夏の姉の千冬が出てきた。

「みどり……お前何してる？」

「身の危険を感じて逃亡」

「一夏と佐久間はあの後、ISに触れて使えることがわかった。いますぐにどここうでできるわけじゃないから家に帰した」

「な、なんだと！それじゃああそこで大人しくしてたほうがよかったんじゃない？」

「当たり前だ馬鹿者！」

ゴッ

どさっ

「つれてけ」

げんこつで悶絶している時に担がれて運び出される。これはこれで誘拐されてるみたいで心が躍る。

「お前もだ」

「えっ、あたしですか？」

「ついて来い」

車に乗らされると、隣にミニマム娘が乗ってきた。

これはタクシーではないのですが何考えてんだろっね。

「あんたの巻き添いよ」

「へー、そりゃ大変だね」

おや？拳を握りしめて震えておるではないか、怖いのかね？
仕方ない手を繋いでやるか……巻き添いにしたんだからこれくらいはしてあげないと、置きざりにした一夏とてっちゃんに怒られる。

ぎゅ

「えっ」

「俺がいるから怖くないよ？」

「なにその理屈。すごく説得力があるけどおかしいわよ？」

「すまないな、怖がらせて」

助手席の千冬がこちらを向いて話しかけてきた。

そう思うなら、左隣りに座ってる人の警戒の眼差しをやめさせてもらえないだろうか？

プレッシャーがすごいのですが……。

「い、いえ。大丈夫です」

「みどり。お前が逃げなければ、お前の彼女も怖い目に会わずにすんだんだぞ」

「か…彼女……／／」

「すみません……でも彼女ではないですよ。このミニマム娘と俺は」
「なんですつてえ！」

いきなり隣のミニマム娘が怒り狂え始めた。
これは危険色だ。

「誰がミニマムよ！まだまだ成長期来てないのよ！」

「成長期来てて、それだと末期だよね？」

「くう！見てなさいよ！高校卒業する時にはナイスバディになってやるんだから！」

「ほいほい。特に期待しないで待ってるよ」

「ついたぞ」

車から降りて、広い部屋に案内された。

そこにはISが一台とウサミミとネコミミが一つずつ置いてあった。

これだなにするのかな？

「……」

千冬はウサミミが突き出ている壁を思いつ切り殴りつけた。
するとそこからヒョコツと人が出てきた。

「いったああい！ちーちゃんひどーい」

「それではみどり。ISに触れる」

「あいよー」

核ミサイルの発射ボタンを軽く押すノリでポンツと触れると、IS
が光だした。
するとISの中に吸い込まれるような感覚と同時に意識が遠くなっ
ていった。

「……んー」

気がつくと俺は地面はコンクリ、空は雲で隠れている殺風景なところに立っていた。

後ろに気配を感じて振り向くと、ボロボロのワンピースを着た小さい女の子がたっていた。

「……貴方、なんで生きてるの？」

「んー、神様に転生させられてね。第二の人生満喫中」

「そうじゃない」

「俺は俺のために生きてる」

そう答えると、女の子は俯いてフラフラと俺の周りを歩き回り始めた。

何がしたいのかわからないんですが？

「……結局自分のためなのね」

「そうだよ？例えばあの人と一緒にいたいから悪いものや引き離すものから守る、そして生きる。人間でいたいから、人間としての最低限のマナーやルールを守る、そして生きる」

「……最終的に、自分のしたいこと〃何かを守り、生きるってこと

「？」

「うー、まだわかんないや。でも結局自分の願いなんだよね。誰かと一緒にいたいとかってさ、だから自分のため」

「……ふーん。馬鹿な上に変な人」

「ありがとう。で、そろそろ戻りたいんだけど」

「……今日はこのへんでいいわ。またね（・・・）」

……り……み……ど……

「みどり！」

「ひゃい！」

ものすごい嫌な予感と共に意識が戻ると、目の前に拳が迫っていた。顔を横に傾けてなんとかかわすと、今度はアッパーが来た。かわせそうになかったので受け止める。

「ああ、よかった。気がついたのね」

「その起こし方はいろいろまずいからね！」

「立ったまま動かなくなったあんたが悪い」

このミニマム娘め、いつか仕返ししてやる！
ゴキブリのおもちゃでな！フハハハハ

「まあISを動かせることはわかった。これで3人と1人か……」

「何の数？」

男でISを動かせるのは俺と一夏とてっちゃんの3人、あと1人が
わからないんだけど。
もしかしたら俺の思ってることは違うことかもしれない。

「受験無しで、IS学園に入学する人数だ。それで君の名前は？」

「あつ、あたしは高橋美佳です」

「みどり、一夏、佐久間、高橋の4人はIS学園に入学だ」

「……………はあ」

「えっ？待ってあたし明日受験……」

「それは私が話を通しておく。IS学園の制服なども用意しよう」

「……………えええ」

「あ、わかりました」

「それでは今日は解散」

これからめんどくさい日々が始まります。
ヘルプミーです。

2「わんもあぶりーず」(後書き)

「ねえ、みーくんってやつぱりすごいね」

「いきなりどうしたんだ？束」

「いきなりISの人格とコミュニケーションとったんだよ？すごいなあ！すごいなあ！ちーちゃん、このISのコア貰うね」

「……はあ、わかった。私が上に話を通しておく」

「ありがとう！愛してるよちーちゃん！（待っててね！すごい作品ちゃうから）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9262z/>

馬鹿ですが何か？

2012年1月5日21時45分発行